

天明七年『花供養』

底本 愛知県大

校異 綿屋

花供養*

(表紙・題簽)

【校異】* 「花供養 南無庵」

(表紙見返し)

いにしへ天和の比、杉風叟が花の句に對して

蕉翁脇、第三より歌仙一卷ともに筆を

染給ふ師に一軸ありけるを、けふや供養

像前にひらかれけるは、彼の天より花の

ふりけるにも此席におゐては、まさり侍り

ければ、すぐに冊子のはじめにをきて

光をそゆることをすゝむるものならし

天明丁未春

芭蕉堂社中誌

歌仙

時節嘸伊賀の山ごえ華の雪

杉風

身は爰元に霞武蔵野

桃青

店賃の高き軒端に春も来て

、

どうやらかうやら暮る年波

杉風

発句脇されば名残の月寒し

、

たそこい鐘は八ツか七ツか

ウ

寝苦敷例のつかえに夢覚て

昨日の酒をとふほとゝぎす

浮雲の消て跡なき扣帳

親仁以来の山嵐の風

古郷の松ははびこる堺杭

朱印を染て時雨降行

探幽が筐の雲に残る月

京橋渡る初雁の声

伏見駕籠扱其比は秋の風

かこひを亭に手枕の露

一生はをごり気のなきわがおもひ

世をうきものにかるうしてをく

はりぬきに都の辰巳山見えて

ふのりをときし寺候な

前髪に立名を包絹のきれ

涙をむすぶ編笠の紐

落る日々心の中ぞ哀なる

まつさかさまに岸の下露

又独つゞいてすゝむ法師武者

いさごを蹴たてゝ尻馬に鞭

寝とぼけて夜深き月に旅衣

三里ばかりの跡の朝霧

追剥に扱もあぶなき野路の露

うけて流いた太刀風の末

ウ

吉岡の松にかゝれる雲晴て

雨や黒茶を染て行らん

消残る手摺の幕の夕日影

火繩の端の一二寸程

何者か詠捨たる花の跡

江戸にも上野国本の春

手向

さくら木の

像や花さき

鳥もなく

闌更

百韻あり略之

○

夢の世におそはれ申桜かな

あふひ

藪の花雑談いふて過にけり

南栄

此夕花ふみ花を詠けり

荻風

吉原やさくら隔て日傘

蛙面

華白に浅黄桜を奪ふかな

平吞

しなへ打花のうしろや家中町

角蜂

京わらべ御室の花にからびずや

曇水

誰か来て短尺のあり初ざくら

杷柳

げにや桜諸木に高し花盛

東雨

上市にしるべもとめて朝の花

其成

○

さもあらばあれ花にはゆるせ飲酒戒

有庸

花一ト木声ある松の数十本

周岱

くりかへす去年の日次や花の町

朋五

価ある浮世は安し市の花

文章

世の嵯峨をちらせ桜のあらし山

嵐月

駕舁は欠伸してゐる花見かな

燕尾

たのしみも花咲春と成にけり

紫更

朝朗さくらがもとの曇かな

之尺

賤が家の麦飯うまし山桜

麦栄

寝上戸と知らで連けり山ざくら

渭川

○

兼てしも思ひ入山のさくらかな

言道

目に立や二本ならびてはつ桜

曾陸

よし野山散るも開くも花ばかり

一峰

遅うてもやはり桜はさくらかな

如此

さればこそ日裏も花の真昼時

三朝

年毎に散る花惜しむ詠哉

佳計

立ぬほど酔つぶれても桜かな

如風

和らかな道のしるべや華の山
嵯峨御室つらなる花の往来哉
山ざくら百が物売菓子屋かな

蘭乃
楽国
羅外

○

葛城や花によごれし人の顔
宿かへて此比花の隣かな

千尺
夢客

散華や払へど杣が鬢の霜

呂風

壬生寺や人ちる跡の花に鐘
見かへれば夜道に白し山桜
てうちんの間は長し花戻り

管鳥
井亮
鈍人

裏門に見なれぬ茶店やはつ桜

西湖

花散て箒に疎き僕ヤッコかな

如菊

○

酒の香は小袖に留て桜かな

女 遊鶴

花やさくら遠山／＼の雲の色

紫石

○

老木の何やら凄し夕桜

玉爪

入相を麓へ送るさくら哉

鬼丈

落る日の松から暮る桜かな

旭溪

何となふたのもしげなり花の陰

直如客

○

後から見れば風あり糸ざくら

嘉菊

花の中や月に傾く後口堂

古塘

ふりかへり／＼つゝ夕ざくら

月峰

○

風吹ば今も散べきさくら哉

在貫

雨の日や鳥静まりて桜ちる

得終

遠退て松の木陰に花見かな

虹光

○

やは／＼と物置枝や花盛り

かゝし

ちる花に枝のあぶなき早瀬哉

布舟

月の夜や都でさくらはうす桜

定雅

○

かしこうぞ花見に來たり翌は雨

几董

散や桜上野の放下はてをうつ

紫暁

眺入て花に物いふこゝろかな

都雀

有明にぬれて散なる桜かな

甫尺

○ 伊賀上埜古雅社中

春はまだ月より高し峰の花

子麦

伸ながら草は伏けり花の蔭

五風

花の蔭迷はん闇も朧／＼

可交

しら雲に酔やよし野の花盛

橘子

閑居の花

蝶鳥の外に友なし庵の花

蘇竹

○

一ト峠最一ト峠や山ざくら

如水

夜ざくらや所／＼に松の闇

其朝

糸ざくら蔭は雨とも柳とも

左月

雪ならば来まじき人や山桜

一如

一もとに幕の多さや遅ざくら

荻里

邪魔に成る枝うたれけり遅桜

歌舌

常に来て寝られふ山か山桜

五明

○

亦惜しき命なりけりはつ桜

鳥夕

人声に猿も出けり山ざくら

寄流

○

雲助は無縁なりけり遅桜

未塵

○

なまぬくし花を吹来る四方の風

同名張

一應

○

梅やなぎ彼是花のひがん哉

城南寺田

秦夫

夜はものゝ寝られぬ花の芳れかな

雲裡

○

いとまなや暮静まつて花の下

八幡

斗流

兎角して花に引るゝ後口かな

北野

梅五

花咲て静に歩む山路かな

佐山励之改* 黄口

大名の一ト日はゆるせさくら狩

、試渕改 馬雪

不自由さの替りに花は近所哉

御室 大樗

黄昏や花にまぶれて啼鳥

山崎 待兎

夜に昼に花に心の動きけり

醍醐 百哺

【校異】 *綿屋本「佐山 励之」(五ウ・8)

○

ねびまさる小町がさまや初桜

十二八

二柳

狩暮てつかれ臥夜の夢も花

奇井

あこがれし花の記念は風かな

丁江

○

押せば明く露路の奥なり山桜

大津

楚南

雨のはな八重九重の覚束な

陀仏

花咲や能道多きひがし山

蓮車

御鬮ふる女いかめし花の影

芦卿

○

夕飯も持て行ばや山ざくら

舟木

甫丈

○

薄縁を敷た宿借る桜哉

一之

志賀越や花に冠の御乗物

自笑

花咲や溝に横たふ竹二本

歌雄

此谷の奥に花あり水の色

カタ、

千羅

○

世のうは気離れて夜の桜かな

太田

瑳雀

只ならば寝られぬ花の木陰哉

裏梅

散花やはじめて風の醜しき

打風

雨麦

○

桜木や見ぬ世の人の花の袖

草津

可能

嶽行や桜伝ひの九折

山上

路橋

花笠やさくらの下の石仏

江村

湖亭

我ひとり塔見る花の後口哉

駒井

柏由

○

今一種散込む花や阿知也羅漬

辻村

梅仙

問ふ人もまれに花散る夕かな

紫水

足事を知るや藁屋の雨の花

千鷲

○

玉味噌や深山桜の哀しる

梅木

鴨鳩

尼御所や浅黄ざくらの一重咲

篠原

暁宇

山は只さくらのものとなりにけり

八幡

文花

○

群れ啼は都鳥かなさくら花

湖東

大夢

天津風の歌の床しき桜かな

、

鷺橋

芳埜山に至りて

花に死シ花に生るゝ心かな

菩提寺

鉄翁

山陰や花に灯す寺の声

石部

良更

在の花四五人づゝの向寄哉

平松

亞溪

菜畑に散るはむざんや志賀の花

、女

しう

○

朝よさに心ひとつや花の比

彦根

青々

花は散れどいそがぬ人の心哉

、

飛川

○

夕風や花散かゝる風呂揚り

水口

唇邦

唐金の鳥井立けり花の中

、

唇洲

我袖に散花見たる火影哉

、

素水

月雪や花のもどりの儲もの

、

如江

○

人起て背中につゝむや夕桜

新城

青牛

二日来ても戻り跡ひく桜哉

上田

可計

○

むつかしき名もなき一重桜哉

土山

素秋

山ざくら常に女は見め所

柳絮

村端やさくら散こむ桔槔

素風

田楽に散かゝりけり山ざくら

吃叟

○

花守や夕暮着たる茶の羽織

伊勢白子

霰打

沖中にまぎる舟あり花日和

宇兆

花の山錆たる煙管拾ひけり

、

夏井

居士いかに花に手を組雨の朝

御菌

岳尔

咲満て牛も隠すや此さくら

、

可計

○

花散るや炭屑ふるふ紙袋

地家

無曲

ア、といふ跡は吃るや山ざくら

、

荻人

けふは又花にいづちの飯食ん

、

澄水

○

花笠とけふは呼れん檜木笠

四山亭

幡水

○

轟くや花見車にはなのちる

勢ノ田

花卿

琴を橋に渡る川あり桜狩

自酬

○

迷ひ入無何有の里や桜がり

津へ夕

雲和

その俣の形は見よし山桜

、岩田

桂岐

山陰や鐘聞なれて散さくら

、八丁

喜花

○

瀧口や浮てゐる花沈む花

一身田

時来

酒くさや花見に袖のふり合

支朗

○

洞津連

初花や此一もとの主は誰

路鳥

島山や花に隠るゝ帆懸船

振衣

花守の年を語らず供養哉

架橋

初花や去年の枝折の草結び

此川

山岨や瀧に散込む花白し

花潮

花守や花に恥入る鬢の霜

崎松

花ちるや箒もあてぬ寺の庭

杜影

神垣やいたゞく桜ふむさくら

楚鴻

爰かしこ杉の晴間や花曇り

淇園

○

花ちるや憂身に帰る日と成れり

雲にそふて静けき花の林哉

頃日やわきて賑ふ花の江戸

○

小嵐や盛りの中の花の声

暮兼る遠山もとの桜かな

閑さや桜の中の星一つ

人伝に花咲伊勢の便り哉

常よりも桜に低し雨の雲

海暮て雪より白し花の陰

志州鳥羽連

湖月

銀帛

雁路

東溪

居敬

如何

維鵲

昔之

古極

横着になりて花見の機嫌哉

蒼梧

○

若州連

裏門に見えや夕ざくら

天徳寺

芝舟

花につくる罪ほろぼしや此供養

長江

芦流

花咲やだまつて通る人もなし

三方

亀卜

一枝は月夜に見せて花戻り

能登の村

補石

花によくつかざる人もなかりけり

、

以中

どちらから見ても桜の表哉

、

貫扨

咲華の中に隠るゝ翁かな

、

鬼雀

花盛り開捨て置庵かな

、

吞孤

瀧壺や夕日散込む山ざくら

、

吐雲

○

我家を見かけて淋し花もどり
酔さめて花散かゝる夕かな

同川原方

一和

希龍

○

なま中に書よごしたり寺の花

丹梶原

洞々

○

花ざかり鳥につれなき礫かな
酔ふて来る人を枝折の華の山
夕暮は僧ひとりなり山ざくら

但生野

松童

、

渡江

豊岡

菊隠

十も目の惜しきよふ也花の山

すゑ

我心花にうつりてやつれけり

千原

和旦

○

散初る花より起るあらし哉

播加古川

青蘿

槇の尾や犬飼ふ寺の夕ざくら

姫路

寒鴻

桜見に人みな這入小寺哉

龍野

化碩

○

曙や桜に近き寺の門

備後田房

古声

天女爰に遠方の高根や花の雲

阿州徳島

枝舟

誠しき人に見よとや花の雨

備笠岡

文里

○

山風や我家を越て散さくら

豊小倉

馬成

鶏を人のくれけり華の庵

、

虚白

花といひ曙といひ此世かな

、

木腸

○

有が中に花折人のこゝろ哉

石見日原

虎山

獨来てよき友にあふ花見かな

、

露竹

遠山の桜しらみぬ宵の雨

長赤間関

薰里

世の中に出けり花のよし野山

筑柳川

東閣

半ば来て足袋踏抜ややま桜

肥長崎

車文

此春や二月の末を華の比

對馬

字湫

○

春の情桜一つに尽しけり

加賀金沢

吳山

酔に匂ふ花の辺りの時宗寺

津バタ

風逸

泥龜の甲に花ちる提かな

賛夫

夕月や照すく花の裏おもて

小松

鳥跡

世に匂ふ翁の花の雫満つ

、

汀画

花の陰曆が提たる草紙哉

、

松曆

○

きたなくも花に鼻の声す也

越敦賀

五鼎

掃除する男しかるや花の庭

同福井

鷺雪

酒臭き土と成まで花見哉

同城端

杜市

○

日は松の中を明行さくら哉

出羽秋田

烏橋

花に来て花の盛を見る日かな

信州松本

可笑

木のもとの旅寝や花の客心

美濃

佳乙

木像の守する花の木陰かな

上州

夢半

○

岸に花麓に酒店あなかしこ

ナニハ

江涯

人なみや我等も花の握めし

雲水

瓜坊

散る花に三絃たゞく日暮哉

和州

不朽

江戸の花駕賃式百奢りけり

上毛

似鳩

さま／＼や花見戻りの坊主もち

津

万化

華の情空にうつりて暮近し

洛

白黛

花戻り珊瑚の鞭をふらつかす

、

車蓋

○

山／＼や花に

くだけし杖の先

闌更

京三条通御幸町西江入町

蕉門書林

菊舎太兵衛梓

(一四ウ・17)

(裏表紙見返し)

(裏表紙)